
俺と彼女のブラックホール

王隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女のブラックホール

【Nコード】

N4192C

【作者名】

王隆

【あらすじ】

高校一年の春。俺はアイツと出逢っちゃった。俺と同じように黒い星が見えるアイツに・・・。

序章

みなさんはブラックホールをご存知だろうか？高密度で重力があまりにも強いために物質も光も放出できない天体。質量の大きな星が一生最後に自らの重力で崩壊することで生ずる。つまり星の終わりに見えるレアな天体みたいなものだ。ではそのブラックホールは地球が終わるときにも現れるのだろうか？そもそも何故このような話になったか？

それはまずアイツに出会うところから話さないといけないな。

高校一年の春。暑いとも寒いとも言切れない心地よい風があたりながら、俺は誰もがもつ期待と不安を胸に抱きながら新しく生活する学校へ向かっている。俺の学校は駅から徒歩20分。学校はまあまあ広く、設備もしっかりしている私立高校だ。

学校に着くと、指定されていた教室に向かい、ここが俺の新しい高校生活が始まるのかあなんて考えながら指定されていた教室を見つけ、出席番号順に座る。

そろそろとこの一年間を共に過ごすみんなが教室を満たし、俺の新しい担任になるような女性の先生も入ってきて、いろいろと学校の事を説明し始めた。

俺は一度は聞いた事のあるようになつまらない説明を聞かず、ふと窓の向こうにある風景を見ることにした。

そこには窓の風景なんか比べ物にならない素晴らしい美貌の持ち主の美少女がいた。

俺も育ち盛りの高校生だし、その方面にも疎いわけでもない。あれだな。クラスに一人はいる可愛い女の子って感じた。髪が長いためかポニーテールをしていて、足は細長く、テレビに出ていてもおかしくないぐらいの容姿だ。少しおとなしそうな顔をしていて、教室の一番窓際の後ろで静かに本を読んでいた。

その時の俺は深い知恵も行動力も人並みでこの素敵な優しそうな美少女高校生がまさかとんでもないヤツとも考えていなかったんだな。
.....

ようやくオリエンテーションらしきことが終わり、クラスでの皆の自己紹介が始まった。俺はこの時間が嬉しくて仕方ない。そう。あの美少女高校生のお名前が聞けるからに決まっている。しかしそのことに浮かれていた俺は何も自己紹介を考えておらず、名前と趣味、出身中学を言っただけで平凡に終わらしてしまった。皆、自己紹介が終わり、ついにその子の番がやってきた。

「羽月ちせな。悔いのないようにこの残り少ない地球の最後を見守りたいと思って生きています。皆さんもがんばってください。」

誰もがこの言葉を理解することはなく、教室の空気がバラエティー番組で滑った芸人を見るよりも寒いどん底の空気になってしまった。先生が慌てて、次の話題に変えてこの状況を救ってくれる。そうでもない、と、氷河時代の空気だ。

この自己紹介事件以降、誰も羽月に話しかけることはなく、羽月自身もずっと本を読んでいた。

クラスの皆はそれぞれ友達をきっちり作っていた。俺も例外ではな
くたまたま俺の席の後ろにいた橘直人と意気投合していた。

橘直人は中学ではバスケットをしていて、高校でもバスケット部に入学して
活躍したいというスポーツマンだ。

「アイツ惜しかったな〜。」

「アイツって？」

「羽月だよ。俺の橘リーダーにはなかなかのレベルだけど、中身が
電波だったとはな〜。不覚だったぜ。まあ俺達のクラスの女子は
なかなかの線だし、困ったことはないけどな。」

確かに橘の意見にも同感だ。羽月の発言はデスメタル並に分からな
かった。理解する事も永遠にないだろう。

そう思っていた俺だが、着々と嫌な波が俺に押し寄せていることな
って想像もしていなかった・・・。

放課後、それぞれが自分の家に帰るために帰り支度をしていた。羽
月も放課後を知らせるチャイムが鳴った途端に、教室から去ってし
まった。

「なんだよ。おまえ。アイツに惚れたのかよ??」

「ちげーよ。ただ単に変なやつって思ったただだよ。」

「なんだあ。つまんね。そーいやお前バスケットしてたんだろう?よか
ったら俺と・・・」

「悪い。俺バイトとかしなきゃならねからさ。」

「そうかよ・・・。残念。俺は今から早速バスケット部に仮入部してく
るからよ!俺の活躍を期待してるよ!じゃあな」と駆け出して教室

を去っていった。

何故か台風が去った後の感覚になってしまい、俺もそのまま家に帰ることにした。

学校が終わり、駅から俺の家まで20分。通学時間は合計40分。なかなか遠い距離にある。

俺は駅で電車を待っていた。明日から何しようかなと思いつつ、この退屈な気分もどう処理していくかを考えていた。

俺は昔はマンガやアニメみたいな夢溢れる世界があると信じていたが、年をとるにつれて、それは所詮マンガやアニメの世界。存在しないものだと思い認識しはじめる。これが大人の階段をのぼるってことかな。

そりゃあ不思議な能力とか未知なる新世界が一度はあつて欲しいとは思うさ。けどそんな馬鹿げたことはない。とちゃんと否定してくれる自分に感謝だ。

しかしこの5秒後に俺はあるものを発見する。

ぼんやりと明るいつ方。月が綺麗に見えていた。しかしその月のすぐ横には黒い星というべきか、黒い点が怪しく光っていた。俺は自分の目を疑ったね。見間違いにしようと俺の脳内裁判ではそう判決を下した。

「あなたも見えたの？」

突然駅のホームで俺はあの羽月に話しかけられていた。あつさり脳内裁判の判決は覆させられた。

これが始まりというべきか俺と羽月の出会いだ。これが純愛恋愛ストーリーの始まりだった。嬉しいものだった。けれどもこれから起こることは俺と羽月の運命ってやつを大きく動かす物語の始まりってやつだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4192c/>

俺と彼女のブラックホール

2010年12月14日17時39分発行